

老舎研究会会報 第8号

胡絮青女士 題字

老舎誕生九十周年 記念の夕べに参加して

丁 秀山

北京へ向かう機内で、ローファットの特別食を食べて、現地時間の午後1時45分北京「首都機場」に着いた。さすが臘月底（旧暦12月末）の北京は寒い。こんな寒い時期を選んで北京に来たのは、外でもなく、去年の夏二ヶ月間入院治療した慢性肺炎を一度漢方医に見てもらうのと、同時に春節（旧正月）を北京で過そうと思ったからである。

ところが思いがけず、と言うのか、都合よくと言うのか、着いた翌日の2月2日、友人の李翔（人民芸術劇院俳優）に案内され、老舎誕生九十周年記念の夕べに出席することができた。これは北京にある中国老舎研究会・北京市老舎研究会・北京老舎基金会・北京幽州書院・北京大碗茶商貿集團の5つの民間団体が主催したもので、会場は前門の西側に新しくできた「北京大碗茶貿集團」ビルの三階にある「大碗茶茶館」という店であった。ビルの二階から階段を登りきった踊り場の正面に老舎の銅胸像がある。「茶館」の入口は左手にあり、入ると広い茶席ホールになっていて、八仙桌（八人掛けの正方形のテーブル）が一面に並べてある。右側は茶菓子室、まん中の調理室への通路をはさんで、湯沸し茶室がある。それぞれの軒下に

- 蜜餞（シロップ漬けの果物）
- 瓜子（スイカやカボチャの種）
- 糕点（ケーキやお菓子）
- 小吃（軽食や点心）

- 珠蘭（茶蘭の花の入ったお茶）
- 雨前（穀雨以前に摘んだお茶）
- 龍井（浙江省龍井に産する緑茶）
- 香片（花入り茶）

と書かれた8つの白文字黒地の木札がぶらさがっていて、札の下には赤い布のふきが付けられ、むかしの茶館の雰囲気を出している。正面には4つの特別個室がある。左側には欄杆があって、一段の高台になった茶席には、やはり八仙桌が並べてある。入り口の左横、つまり個室の反対側には寄席や寸劇などができる小さな舞台があって、ホールの天井には4つの大きな宮灯（ランタン）が吊してある。

その日は、店を借り切って記念行事が行われた。舞台の正面上には「民間記念老舎先生九十周年誕辰」と書かれた赤地に白文字の横幕を掛け、そして舞台の両側には、曹禺をはじめとした文芸人達が茶館に送った言葉や対句をかかげてあった。その中では胡絮青女史の書いた
碗茶水沸邀請客
揮毫情誠結友誼
の軸が目立った。

出席者は老舎の家族全員をはじめ、李筠（北京人民芸術劇院党書記）、呉祖光、于是一、溥傑など文化・芸能人約200人。記念の夕べは6時から始まった。色々な団体からのあいさつの中では、老舎の愛国の情熱、人々に対する思いやり、民衆を愛し、また民衆に愛されていることがうかがわれた。作家の鄧友梅のあいさつでは、自分が作家の道に進んだのは、老舎先生の鞭撻と切り離すことができない、と、老舎の暖かい心を思い出し、涙ぐんで声がつまったほどだった。また老舎研究会の呉祖光会長のあいさつでは、日本やアメリカでの老舎研究及びその

活動は、中国に較べて遥かに進んでおり、特に日本での老舎研究を始めたたえた言葉があったので、日本から参加した私としてはいい気分だった。日本の老舎研究会を代表してあいさつを頼まれた私は、日本での老舎研究の情況や各地の活動を説明した。東ドイツの老舎作品普及会のあいさつもあった。そして「大碗茶茶館」の責任者である尹盛喜のあいさつでは、このような老舎誕生記念会をこれから毎年催すことを皆なに約束した。

そのあと余興に入り、かつて老舎が教えていた小学校の低学年生たちが踊りをやったり、高学年生が老舎作の「葉」を朗読したりした。有名な役者や漫才師が老舎改編の京劇「王宝玢」を唄ったり、「にせ博士」の漫才やまた「京韻大鼓」をやったりした。老舎作「茶館」の数来宝を演じた童弟も牛の骨を叩きながら舞台上に上った。寸劇では「宝船」、曲劇では「方珍珠」それぞれ名役者によって披露された。李翔も李婉芬（人民芸術劇院の女優）と「駱駝祥子」の祥子と虎妞の一場面を演じた。20数年も舞台から離れて、唱うことのなかった著名評劇役者、呉祖光夫人である新鳳霞も足が不自由にもかかわらずわざわざ車椅子でかけつけこの日のために一曲唱った。そしてアンコールにこたえて、老舎先生の自分に対する思いやりと親切心を節をつけて唱ったのには、満場の拍手が湧いた。記念会は延々と3時間半も続いた。ホテルに帰ったのはもうすでに10時をまわっていた。

今回の北京の旅は、「治病」、「過春節」よりも記念会に出席できたことが意外な収穫だった。この記念会を通じて、老舎の人間性・情熱・暖かさ・そして多才多芸なこと、その広範囲にわたる作品は民衆との間に大きな絆となり、民衆から深く愛されているということを肌で感ずることができた。



会場にて挨拶



新鳳霞が唱う



京劇「王宝玢」を唱う

ある噂

—竹中伸訳『駱駝祥子』をめぐる—

日下 恒夫

竹中伸が『駱駝祥子』を英訳版から重訳したという話は、「専門家」のあいだでいわば周知の事実として三十数年間に亙りかなり広く信じられてきた。私が初めてその噂を耳にしたのは学生時代、1967年か68年の頃である。その後、まったく同じ話を70年代の半ばにも、さらには80年代に入ってから、複数の人から聞かされた。いずれも中国語や中国文学の専門家であるばかりか、日頃から老舎愛好家を自任する人の口から出た言葉である。しかもそのなかの一人はずいぶん若い人であった。また同時に翻訳の不正確さという話も何人もの人から耳にした。

もちろん外国文学を紹介するにさいして重訳による場合もありうるのであるから、竹中が重訳したという事実がかりにあっても、その行為

自体が咎められるいわれはない。しかし、竹中が『駱駝祥子』を英訳版から重訳したなどというのは、まったく事実と反する。

竹中伸訳の『駱駝祥子』は、昭和18年(1943)3月20日に新潮社から発行された。四六判、本文全425頁、巻首に周作人の中華民国31年(1942)9月25日付の序2頁およびその訳文2頁があり次に昭和17年(1942)8月30日付け訳者自序2頁を置く。水野清の装丁になる。ちなみに、竹中が翻訳にさいして依拠した版本は、翻訳年代から考えておそらく初版本の人間書屋本(1939・3)か文化生活出版社本(1941・11)のいずれかである。なお、周作人の序文も今では『知堂序跋』(岳麓書社、1987・2)に再録されており簡単に見ることができる。

一方、英訳本のほうは、『駱駝祥子』に関する文章のなかでしばしば触れられるものであるが、英語で書名を『Rickshaw Boy(洋車夫)』といい、Evan King(Robert S.Ward)の翻訳。A5版、全315頁。1945年に、Reynal & Hitchcock, Inc.(New York)より発行され、Book-of-the-Month Clubによって選ばれベストセラーとなる。翌年1946年にはSun Dialpress(New York)からリプリント版が出版されている。

出版年度を見るまでもなく、竹中が英訳版を重訳するなどということは不可能である。重訳説の出処はいずれ一つであろうが、おそらく「権威」や影響力のあるところから生まれて、代々噂話として語り継がれているうちに、多くの人がそう信じるようになったものに違いない。では、一体どうしてあたかも事実であるかのように、このような無責任な「中傷」(といってよいだろう)がまことしやかになされたのだろうか。今のうちであれば、この噂の出処を調べる手立てもある。だが、そのような詮索自体あまり愉快なことでもないし、意味のあることとも思われないので、ここでは「竹中重訳説」が単に無責任な憶測と偏見から生じたものに過ぎないということだけを言っておけば充分である。ただ、そのような噂が生れるにいたった事情を推測することは可能である。

竹中は通訳官として北京在勤中、『東亜新報』

主筆の徳光衣城からの依頼により、同紙連載の特別読み物とすべく『駱駝祥子』の翻訳を始めたのであるが、結局新潮社から出版することになった。その間の事情は竹中自身の言葉によると、約二年の歳月をかけて脱稿した翻訳稿を、たまたま北京に来ていた新潮社編集長の佐藤亮一が徳光宅において読んだことが機縁となり新潮社で出すことになった。

初版は三千部であったが、続いて同年6月に2刷が五千部(竹中は六千部といっているが、記憶違いかミスプリントであろう)出版された。それも好評につき、さらに8月には三刷六千部を出すべく企画されたが、老舎が「抗日作家」であるという理由で「出版協会(統制機関)」によって出版禁止措置がとられ結局絶版となり、再版は戦後三年を経なければならなかったのである。ただし、ここで『出版協会』といったのは、竹中の言葉の引用であるが、出版協会の創設は1945年10月10日であるから、これは氏の記憶違いであろう。ここは1943年2月18日の出版事業令公布により同年3月11日に1940年以来の出版文化協会が解散移行して創立された『日本出版会』とすべきである。その戦後にやはり新潮社から再版された本は、おそらく戦前のものと同じ紙型によるものかと思われるが、昭和23年(1948)2月28日発行、全425頁、巻首に昭和23年1月2日付けの訳者序1頁がある。装丁は宮本三郎による。また当然のように周作人の序文も削除された。8月25日には2刷が五千部発行されている。ところが、この再版本の裏付けには、不思議なことに初版本に関する事項が印刷されていない。竹中がこの本を「返り初版」と称する所以であろう。ついでながら、この本も三刷一万部が企画されたが、今度は占領軍の命令により発行禁止ということになったという。

さて、上述したことから予想されるように、真の初版本の存在を知らず再版本しか見なかった人がこれを初版本であると考えたとしても無理はないとも言えよう。そのような人は中国文学者のなかにも多かったのかもしれない。そうでもなければ、竹中が英語から重訳したというような噂の出てくるはずがないからである。さらに、竹中は『駱駝祥子』の翻訳を試みていた

頃は興亜院通訳官であり、その前後も外務省書記生、日本大使館一等通訳官、副領事というふうに戦前は長く官界にいた人であり、いわゆる学界の人達との往来は多くなかったにちがいない。それもおそらく噂の醸成に関係していよう。あるいは竹中が若いころ東京外語で英語を学んだということも噂の助長を促したかもしれない。

とにかく戦後に再版本だけを手にしたものが、それまでに中国文学者や翻訳家としては聞いたことのない訳者の名前を目にし、しかもアメリカで『駱駝祥子』がベストセラーになっているなどという風聞を耳にした途端、もちろん英語版と対照してみるようなこともなく英語からの重訳であるときめつけ「権威ある」噂話を作りあげたのであろう。

ともあれ竹中伸は、『駱駝祥子』を中国語版から直接日本語に翻訳したのであり、しかも、Evan Kingによる英訳“Rickshaw boy”に先立つこと二年、世界で最も早く外国語に翻訳したのである。このことは老舎研究家にとって今日では周知のことであるが、あるいは今も噂が生きていないとは限らないことと、老舎の翻訳・研究史を記述するうえで曖昧なままにしておくことはできないと考え、記しておくことにしたのである。

ところで、竹中の翻訳に関してはもう一つの噂がある。翻訳の不正確さということである。これも重訳説と関連して生れた可能性があるが、あるいは竹中の翻訳方法というものが関係するかもしれない。ただ、たとえば竹中が『駱駝祥子』を翻訳したときの経験について語ったエッセイ「〈補稿〉私と中国文学」で、「最初は原文に忠実に訳し、訳した後原文と対照しながら筆を入れて書き直し、最後に原文を離れて日本文の読み物とするべく、出来るだけ「翻訳臭」をなくすることに務め、そのために原文の意味を損せぬ範囲で前後の文句を入れ替えたり、日本人に分かり易い用語に書き改めたり、なるべくスラスラと面白く読めるように苦心し……」と語っているのを読めば、竹中式の翻訳の場合、個々のセンテンスについて翻訳文の不正確さを云々しても始まらないと言ってよい。もっとも私自身はなにも竹中のやりかたに同意している

わけでもなければ、誤訳がないなどと言いたいわけでもない。それどころか、今日のわれわれにとっては、竹中の誤訳を指摘することはいくらかでも可能である。それは「流麗な名訳だと評判で」あった奥野信太郎の『趙子曰』の誤訳を指摘するのと同じくらい容易なことである。およそ翻訳というものについては、のちの人間が先人の訳文中に誤訳を指摘することは易しい。誤りをあげつらう側は訳者よりはるかに少ない学力があれば足りるからである。しかも殆ど何の工具書もなしに行なわれた翻訳の場合はなおさらである。竹中の翻訳については、重訳説がそうであったように、これも噂が必要以上に今も独り歩きしているように思われる。もうそろそろ我々は風聞や流言によって批評したり証拠もない噂話の再生産に加担したくないものである。

〔付記〕出版にいたる経過や絶版処分にかかわる話のみならずさまざまな事柄について竹中伸氏自身からかつて直接お聞きしたことがあるが、記憶の不明確な部分は今回二つの文章によって確かめえた。その一つは、昭和三十年代の高等学校国語教科書に竹中訳の『駱駝祥子』が採用されたことがあるが、その『高等国語総合3』の教師用「指導資料」（1957・6・20 明治書院刊）の解説中に引用された（同書 p.345）竹中氏の編集部にあてた手紙であり、もう一つは、「〈補稿〉私と中国文学」と題する竹中氏の回想文である。これは二松学舎大学文学部中国文学科の語学ゼミ授業生の編集になる『蒼天——竹中先生退任記年集——』（1976・1・22）所収のものによる。なお、前者は御子息竹中義氏の、後者は斎藤喜代子氏の好意によって参照することができた。お二方に鳴謝する次第である。

老舎資料近刊(5)

1986年追加

20. 邵煌「有关“武汉文化界抗战协会”的史料」
中国现代文学研究丛刊 3期 8月 p.251
~ 262

21. 老舍著区铁译「现代中国小说(“The Modern Chinese” National Reconstruction 学术建国丛刊第7卷1期(1946年7月))」同上 p.273~281
22. 王家声·区铁「从《现代中国小说》看老舍文艺观的发展」同上 p.282~290
23. 曾广灿编『老舍代表作』黄河文艺出版社 8月 p.1~486
24. 曾广灿「《老舍代表作》前言」同上 p.1~20
25. 舒乙编『老舍写北京』百花文艺出版社 10月 p.1~162
26. 老舍「秦氏三兄弟——《茶馆》前本」十月 6期 11月 p.98~135
27. 舒乙「由手稿看《茶馆》剧本的创作」同上 p.136~138·135
28. 胡絮青·舒济编『《老牛破车》新编——老舍创作自述』三联书店香港分店 11月 p.1~238
29. 胡絮青·舒济编『文牛——老舍生活自述』同上 p.1~278
30. 日下恒夫「老舍与我」世界纪实文学 第2辑 11月 p.211~220
31. 日下恒夫「老舍与西洋——从《猫城记》谈起」复旦学报 6期
- 1987年
1. 谭乃立「全国文联举行茶会欢迎老舍自美返国」北京日报 1月4日 2版
2. 王民益「电影学院师生在《茶馆》一试身手」北京晚报 1月5日 4版
3. 夏葆元·林旭东「《正红旗下》插图」同上 1月7日 3版
4. 杜广义「《八方风雨》话老舍」同上 1月11日 3版
5. 朱贺「为让法国人了解老舍——访著名旅法翻译家李治华」同上 1月16日 1版
6. 韩经太·李辉「中国新文学发展中的老舍」文学评论 1期 p.103~113
7. 克莹·龙璋中「八方风雨」中外电影 1期 p.19~46
8. 阿蒙「老舍诗与“曹雪芹传说”」北京晚报 2月9日 3版
9. 顾曲郎「老舍名剧《归去来兮》在京上演深受欢迎」北京日报 3月9日 2版
10. 岡部謙治「老舍『茶馆』舞台上演録音テープの“拼音文字”化資料——その2——」语学教育研究論叢 第4号 p.293~345
11. 岡部謙治「同上——その3——」外国語学会誌 第16号 3月15日 p.131~195
12. 诸天演「青年人要学会过日子——胡絮青忆老舍谈勤俭持家」北京晚报 3月19日 1版
13. 伊藤敬一「老舍文学私論」外国語科研究紀要 34卷5号 3月23日 p.1~16
14. 伊藤敬一「《微神》与老舍的文学」同上 p.17~32
15. 伊藤敬一「《老舍文学私論》和《“微神”与老舍文学》两篇论文的后记」同上 p.33~37
16. 陈孝全「老舍短篇小说欣赏」广西教育出版社 3月 p.1~245
17. 舒乙「老舍爱北京的启示」人民日报(海) 4月1·2日 8版
18. 王晓芳「北京两个太平湖」北京晚报 4月17日 3版
19. 「『老舍生活歷程展』開展」人民日报(海) 4月24日 5版
20. 「《老舍代表作》」北京晚报 4月24日 3版
21. 安伟·刘震昭「《龙须沟》剧组故地游感慨京城面貌巨变」北京日报 4月26日 1版
22. 刘震昭·安伟「“程疯子”重访“龙须沟”」同上
23. 北京人民艺术剧院蒋瑞编「“龙须沟”的舞台艺术」中国戏剧出版社 4月 p.1~436
24. 人民文学出版社·三联书店香港分店『老舍生活歷程展』
25. 「老舍生活歷程展」讀者良友 6卷 4号 4月 p.5~7
26. 王璐「《老舍選集》序」同上 p.8~13
27. 福田明子「外行話」人艺之友报 7月试刊第1期
28. 吴小美·魏韶华「现代性与传统性的交战

- 论老舍对传统文明与现代文明的批判」
中国现代文学研究丛刊 3期 8月 p.130
~147
29. 舒乙主编『老舍之死』 国际文化出版公司
8月 p.1~244
30. 舒乙『老舍最后的两天』 花城出版社 10
月 p.1~289
31. 平松圭子「“秦氏三兄弟” — “茶馆”の
草稿」 東方 79号 10月 p.7~8
32. 『老舍文集 第12卷』 人民文学出版社
11月 p.1~522
33. 曾广灿『老舍研究纵览』 天津教育出版社
11月 p.1~345
34. A·A·宛基波夫斯基著宋永毅译『老舍的
早期创作与中国社会』 湖南文艺出版社 11
月 p.1~242
35. 周关东『老舍小说比喻撷英』 华东师范大
学出版社·鈴木出版株式会社 11月 p.1~
172
36. 白鹤群「老舍逝后第一碑」 燕都 6期
12月 p.33
37. 柴垣芳太郎「老舍著作年表」 龍谷紀要
9卷2号 12月20日 p.113~165
- 1988年
1. 『太平湖』 北京人民艺术剧院节目单
2. 林兆华「导演的话」 同上 表紙裏
3. 苏叔阳「奉献给观众的心意 — 写在《太平
湖》上演时」 同上 p.2
4. 舒乙「问答 — 关于老舍先生」 同上 p.3
5. 于是之「我担心演得不好」 同上 p.4
6. 舒乙编辑「老舍生平大事记」 同上 p.5
~7
7. 「关于洛阳文协分会组织问题 — 老舍致梅
隐的一封信」 中国现代文学研究丛刊 1期
2月 p.279~280
8. 王列耀「介绍老舍的一封信」 同上 p.
281~282
9. 杨义「茅盾、巴金、老舍的文化类型比较」
(文艺研究 87年4期) 摘录 同上 p.
298~299
10. 郎云·苏雷「写家春秋 — 老舍」 北岳文
艺出版社(山西省太原) 2月 p.1~297
11. 高橋弥守彦「『茶馆』の版本比較と時代の
考察(その1)」 大東文化大学教養課程創立
20周年記念論文集 3月30日 p.475~
490
12. 高橋弥守彦「同上(その2)」 語学教育研
究論叢 第5号 3月15日 p.162~180
13. 杉本達夫「文協発足時の諸文書について」
早稲田大学社会科学研究所社研研究シリーズ
22号 3月 p.21~48
14. 渡辺安代「老舍『神拳』について — 『義
和團』『吐了一口气』との関わりの中から」
お茶の水大学中国文学会報 第7号 4月
p.139~155
15. 苏叔阳「惶惑的思考 — 谈《茶馆》所体现
的戏剧观」 中国现代文学研究丛刊 2期 6
月 p.167~178
16. 谢昭新「老舍散文艺术欣赏」 同上
p.179~192
17. 舒乙著中島晋訳『北京の父 老舍』 作品
社 7月30日 p.1~260
18. 『老舍文集 第13卷』 人民文学出版社
7月 p.1~510
19. 舒悦译注「老舍致美国友人书简四十七封(1948年4月—1952年10月)」 十月
4期 7月 p.209~224
20. 〔美〕琼·罗斯·盖罗特「老舍英文信件发
现经过」 同上 p.223
21. 舒悦「新发现的老舍英文书信的史料价值」
同上 p.223~224
22. 王可「老舍与于是之」 燕都 4期 4月
p.34~35
23. 冯健男「词三首：叶圣陶为朱自清丁玲老舍
写像」 新文学史料 3期 8月22日 p.
37~40
24. 骆文「阳坡上的大树 — 和老舍先生相处的
日子」 同上 p.110~114
25. 徐文斗·周海波·李惠彬「论《四世同堂》
的使命意识」 抗战文艺研究 第2辑 8月
p.20~35
26. 冉忆桥·李振瀛『老舍剧作研究』 华东师
范大学出版社 8月 p.1~304
27. 倉橋幸彦「“写家”老舍 — 「山東」時代

の創作と関連して」 中文研究集刊 創刊号
12月15日 p.55 ~ 64

28. 日下恒夫「老舎と西洋に関して — 從「猫」
」經「牛」到「駱駝」」 同上 p.65 ~ 83

29. 中山時子編『老舎事典』 大修館書店 12
月20日 p.1 ~ 704

30. 舒乙『老舎的关次和爱好』 中国建設出版
社 88年 p.1 ~ 142

事務局だより

◇88年7月16日、中京大学名古屋学舎において例年のごとく研究発表会ならびに総会が開催されました。暑中のことでもあり、なんとか冷房設備のある会場をと、事務局の方で苦心して会場さがしを致しておりましたが、容易に決定することができず、困りはてておりましたところ中京大学当局ならびに丁秀山氏の御尽力によって、同大学の施設を利用できることになりました。心より感謝の意を表します。

◇11時から委員会を行ない、ひきつづき午後1時半から研究発表が行なわれました。当日の発表は下記の諸氏です。

1. 杉野元子（慶応大大学院）
「老張の哲学」をめぐる二、三の問題
2. 金森由美子（神戸山手女子短大）
「駱駝祥子」をめぐる
3. 大塚秀明（筑波大）
老舎初期の作品に見られる語法について
4. 高橋弥守彦（大東文化大）
「茶館」の版本について
5. 伊藤敬一（中京大）
老舎短篇小説の研究について
6. 中山時子（明海大学）
「老舎事典」について

◇4時半から同じ会場で総会が行なわれました87年11月に本会が中心となり、大東文化大学の御協力を得て実現することのできた曾広燦氏招聘の件、88年6月の中国老舎研究会々長呉祖光氏来日の件などを中心に、柴垣代表委員から会務報告があり、ついで決算報告とその承認という運びで進められました。

◇この度の総会は役員改選を主要な議題としており、委員・常任委員・代表委員・会計監査と順次選出されました。新選出の役員は当日配布の会員名簿に記載されたものと変わりませんのでそちらを御覧ください。

◇総会終了の後、5時半から今池東天閣にて懇親会がにぎやかに開かれましたことは例年の通りです。

◇総会の会務報告の中でも触れられましたが、本会の定例研究会として、名古屋大学と竜谷大学の二か所で、老舎作品の読書会が開かれております。名古屋大学では毎月第二土曜、「国家至往」を取りあげ、竜谷大学（深草学舎）では第三土曜に「集外集」を読みつけております。また、これは直接本会との関係はないのですが東京では長くつづけられていた水氏の後をついで、桜美林大の金氏が老舎作品の講読を毎週日曜日に続けておられる由です。参加希望者は武永尚子会員（0423-84-5152）にお問い合わせ下さいとのことでした。

◇本年88年3月21日から25日まで、中国では第四次老舎学術討論会が重慶の重慶出版社招待所で開催されるとの連絡が入りました。主催団体は、中国老舎研究会・重慶文連・作家協会・西南師範学院・重慶師範学院です。本会からも、何名かの方が出席予定と聞いております。

◇また、本年8月21日から25日まで、北京において老舎生誕九十周年記念ということで、北京国際老舎学術討論会の開催が予定されております。討論会のテーマは、「老舎創作と中外文化」とのことです。当初、中国からこの討論会の開催に当って、本会も主催団体の一として参加してもらいたいと要請があり、昨年暮れに緊急の委員会を名古屋において行ない、中国側の申し出を了承することに決定いたしました。従って、当討論会の主催は、中国老舎研究会、国際老舎友人協会、ならびに本会ということになります。

◇「老舎事典」の計画が中山時子会員のもとで進んでいることを、数年前から聞いておりましたが、いよいよ完成に近づいたとのことでしたので、研究発表会の中で特に請うて進捗状況やその内容等について御報告をお願いいたしました。

た。その書物が、昨年12月に『老舎事典』（中山時子編、大修館書店刊、8400円）として刊行されました。国内外から多くの老舎研究者が執筆に参加し、必要に応じて図版挿図を添えることを惜しまず、総頁704頁という大作です。ここでは御紹介を兼ねて、とり急ぎ目次だけをかかげさせていただきます。

『老舎事典』に寄せて（胡絮青）

序言（中山時子）

第一章 北京の街

老舎の作品における北京

北京の交通

北京の植物

北京の看板

第二章 北京の人々

官吏

文化人・大学生たち

商人・物売り

職人・人夫

兵士・巡査

その他の人々

第三章 北京の庶民生活

衣（付、衣服の材料）

食（付、素材）

住

第四章 北京の風俗習慣

年中行事

冠婚葬祭

芸能・趣味・娯楽

第五章 北京の社会

庶民の経済

医療

庶民の宗教

過渡期の教育と学校（付、学校関係用語集）

通信と情報

（以上前編）

老舎略伝

老舎と宗教

老舎の家族

老舎の生家および居宅

老舎と私（ポール・バディ）

諸外国における老舎作品の翻訳

老舎年譜・著作年表

老舎作品語句解釈

（以上後編）

参考文献

跋（中山時子）

索引

◇「老舎を研究する為の事典をまとめたいと思ったのは、今から20年近くも前のことであった。序言にもふれた如く、私は老舎の作品を今後も人々が愛読してゆくには、どうしても、その手引になる事典が必要であると痛感していた。それは、老舎の小説そのものが、解放後の中国の人々には、すでに情緒的にむずかしい世界になりかけているし、ましてや日本のわかき中国文学研究家や愛好家にとって、従来の言葉の辞典だけをたよりにしては、十分な理解もできないのではないかと思っていたからである。」

（『老舎事典』跋の一節）

◇「私は『老舎事典』には次のようないくつかの特徴があると思います。」として、胡絮青女士は「『老舎事典』に寄せて」の中で、次の諸点を挙げておられます。

1. 本事典が日本のみならず、世界でも初めての老舎事典であり、先駆者の地位をもつことです。

すべては初めが難しく、始める時の難しさは並大抵のことではありません。このように困難の第一歩を踏み出した人々は勇敢であり、その功績は大であります。

私はその勇氣に対して敬意を表します。

（以下摘録）

2. 本事典の取扱う範囲がたいへん広いことです。

3. 本事典が高い実用価値を有することです。

4. 本事典そのものが一つの重要な学術研究の成果であることです。

◇本年度の大会までに、会報をもう一号出したいと思います。原稿をお寄せ下さい。

老舎研究会会報第8号（1989年3月1日）
〒464 名古屋市千種区不老町 名古屋大学文学部中国文学研究室 老舎研究会事務局
（TEL 052-781-5111 内線2245）